

③—横浜の活力の創造

1. 横浜の活力

●横浜は大都市か？

大都市「横浜」。本当にそうであろうか。

図1は、昭和五五年時点での客観的データを指数化して、大都市の実態を表現したものである。円の半径は大都市の平均値を表わしている(ただし東京は除く)。指数の中味あるいは指数のとり方によっては、表現が異なる可能性はあるが、横浜市の実態を知るひとつの目安といえよう。

現在の大都市の姿を人にたとえると、この図から次のように表現できそうだ。

まず、大阪をみてみよう。「体は大きく、栄養源はいっぱいある。よく働き、よく遊び、生活をエンジョイしている。骨太で筋肉質である。」

名古屋はどうだろう。「体の大きさは普通で、それを支えるだけの栄養源はある。仕事も遊びも普通に行っている。中肉中背の状態は今後も変わらないだろう。」

横浜はどうか。「体が大きい割には栄養源が乏しい。仕事や、知的活動をしたり、遊びに行きたくともままならず、体をもてあましている。骨はあまり太くなく、筋肉質

ではないが、この先、まだ大きくなりそうだ。」

すなわち、横浜は、人口の規模や増加の点では大都市といえるかも知れないが、人口規模に見合うだけの都市機能の点からすると、まだ成熟した都市といえる段階ではない。文化活動の場、娯楽の場、買物の場、働く場、物をつくる場などの機能が充実しておらず、都市全体の活力も十分とはいえない。

●横浜の新たな活力

いきいきとした都市として必要な「横浜の活力」とは何か。また、だが、どのようにしてそれを生み出していくのであろうか。

横浜には、さまざまな市民がいる。住んでいる市民。働いている市民。地域活動・文化活動・教育活動など社会活動を行っている市民。企業活動・生産活動を行っている市民。外国籍の市民。観光やビジネスで訪れる「一時的な市民」。これらの市民が、毎日、横浜を舞台に活動を展開している。また、横浜は、うるおいのある生活の場、

●第4章／あすの横浜のために

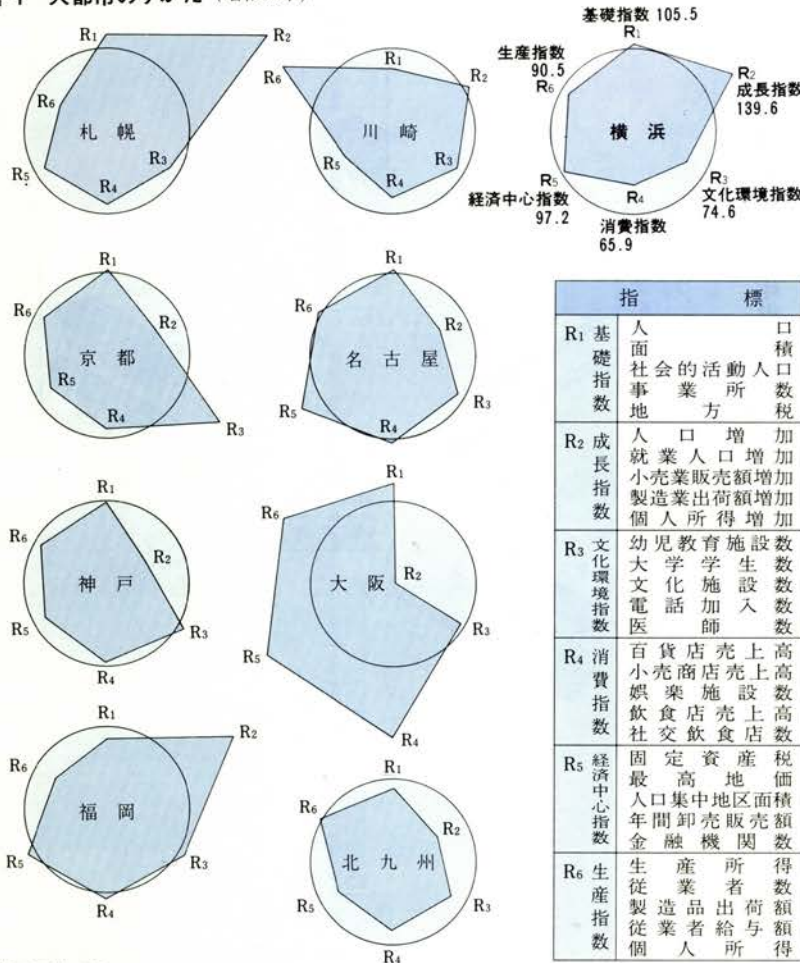
そのためには、さまざまな市民が活動しやすい環境が必要である。道路、鉄道、下水道など都市の基盤整備をしていくことは当然必要であるが、地域において、市民の連帯意識を高め、地域活動を活発にするための環境づくりをどのように進めていくのか、郊外部と中心部を一体化して市として

をつくり出していかねばならない。そうした市民のなかにある潜在的な活力をいかに掘り起し、都市全体のものにしていくかが、今、問われている。ともすれば、社会経済情勢が沈み込みがちな時期であるだけに、従来にもまして潜在的活力を最大限に引き出し、新たな横浜のダイナミズム

をいかに掘り起し、都市全体のものにしていくかが、今、問われている。ともすれば、社会経済情勢が沈み込みがちな時期であるだけに、従来にもまして潜在的活力を最大限に引き出し、新たな横浜のダイナミズムをつくり出していかねばならない。

創造力を高めていく場であり、同時に生活に必要な生産活動を行う場でもある。とすれば、横浜の活力とは、さまざまな市民が、充実した生活を営むため、地域・都市・首都圏・国際レベルにおいて活動を行い、それらが都市全体に反映され横浜の発展を促していく総合的な力といってよいであろう。

図-1 大都市のすがた (昭和55年)



[資料] 企画財政局

のまとめりをつくるには、何を行っていくべきか。さらに、首都圏において政治的、経済的、行政的、文化的主体性を確立し、国際性を高めるにはどうすべきか。市民と

行政が一体となって考える必要がある。その実現にむけて、適切な目標を提示し、効率的な誘導を図っていく役割を担うのは、都市自治体としての横浜市である。